

幼稚園における未就園児をもつ親子のためのワークショップ

— 遊びを介した親子関係の発展をめざした
幼稚園の子育て支援の取り組みから —

川喜田昌代・金田利子・霜出博子*1・大浦陽子*2

I. 問題及び目的

今日、子育てに不安や悩みを抱く親が増加してきている中、さまざまな子育て支援活動が行われている。幼稚園、保育所などや、地域での子育て支援事業などいろいろな機関において行われ、内容もさまざまである。子育て支援に関する研究も多くなされてきている。幼稚園での預かり保育や保育所の長時間保育に見られる子育て支援の検証や、親の育児不安や育児の負担感解消など、様々な親の子育て支援のニーズに対する取り組みの研究が取り上げられている。

しかし、その内容について見ると、多くの研究では、親の育児不安からくるストレス解消に目が向けられており、「親自身が子どもとともに遊びを楽しむ」ことに焦点をしばった幼稚園・保育園での子育て支援の研究は、あまりみられない¹⁾。2005年の「保育学研究²⁾」では、少子化対策という政策的な目標の実現を目指すため、子育て支援事業がすすめられてきている中、子育て支援の実態や課題について検証されないまま広がる支援事業について、研究調査の必要性から課題テーマとして取り上げられているが、それも研究対象とされたのは、保育所における子育て支援事業および活動の取り組みの実態と今後の課題（金谷ら³⁾）についてであった。

また、最近出された先行研究では、2007年無藤らの日本学術振興会科学研究費助成による研究報告「子育て支援のあり方とその基盤となる家庭での養育の様子の検討を目指した研究⁴⁾」がある。そこでは、預かり保育、子育て相談、就園前の親子への支援についての支援の実施の有無、支援内容、利用実態とその評価等について広範囲での調査結果が報告されているが、子育て支援の活動内容との関連の研究についてはその対象になっていない。

多くの子育て支援事業がおこなわれてはいるが、幼稚園・保育園での子育て支援のねらいや内容について詳細の全貌は、明らかになっていないことが多い。

*1・*2附属幼稚園教諭

Masayo KAWAKITA, Toshiko KANEDA, Hiroko SHIMOIDE, Yoko OURA : Workshops in a Kindergarten for Parents with Under Three Years' Children — Through the Playing Activities for Developing the Parents and Child Relation —

一方、子育て支援事業の内容においては、親子で遊びを楽しむことや親同士の交流を進める場は、かなり出てきていることが分かっている（杉山，2003）⁹⁾。しかし、「遊びそのものに注目し、遊びの面白さに親が目覚め、そのことを通して親が親として育っていく過程」に注目した研究は見られない。

そこで、ここでは子どもの育ちの中で、大切な「遊び」に注目し、「親自身が子どもと共に遊びを楽しむ」ということに焦点を絞った幼稚園における実践について考えてみたい。本大学の附属幼稚園である白梅幼稚園においては、「遊びを介しての親子関係」の発展を意図して行われてきている、未就園児をもつ親子のための子育て支援事業である「ひよこの会」がある。園でのこのような取り組みを一般的には、そして白梅幼稚園でも「子育て支援活動」として位置付けているが、本研究ではこの活動を、未就園児をもつ親子のためのワークショップとしてとらえて考察することとする。その理由は、P50の＊に記述している。

子育て支援の研究では、親の育児不安からくる子育てのストレス解消については多くなされている。子育てのストレス解消は大切ではあるが、どちらかといえば消極的な方法であり、親子が遊びを楽しむという積極的な子育て活動をすることが、結果的にはストレスも解消されるということに繋がる方法でもあるのではないかと思われる。そこで白梅幼稚園では次に示す金田の仮説（図1）のAゾーンにはいる親子が多いだけに、「親子が共に遊びを楽しむ」ことによる幼稚園における子育て支援の在り方を検討することにした。

Aゾーンが中心となるが、それだけではなく地域においての子育ての孤立化を防ぐというねらいから、多くの親子を対象とした市町村などに常設される子育て支援センターは、2002年に開設された「武蔵野市立0123吉祥寺」をはじめ現在ではかなり普及してきている。親と子が自由に遊べる遊具が備えてあり、必要に応じて支援するスタッフもいる。ここは、幼稚園が媒介となる「ひよこの会」とは違い、開設時間（午前9時から午後4時まで等7時間程度の場合が多い）の間ならいつでも自由に利用でき、その主なねらいは、子育ての仲間を増やし、親子でゆったりとした時間を過ごす（「0123吉祥寺」のホームページより）というものである。また、「東陽子ども家庭支援センターみずべ」では、子育ての手伝い（一人で悩まず、みんなで考え助け合い、第二の実家のつもりで気楽に遊びに来られ、オモチャ・絵本を用意しスタッフが待ち、子ども、父母にとっても新しい出会い）の場（東陽子ども家庭支援センターみずべのホームページより）として位置づけられている。

それに対してここで取り上げる幼稚園の子育て支援の場は週に1回2時間と限られ、限られているからこそ、保育の専門家である保育者が直接・間接に親子の遊びの支援に関わるという点に特徴がある。

ここで、今日の子育て支援で大切にしていけるべきことについて考えてみると、執筆者の一人である金田⁶⁾は、生活環境の変化に伴い、保育に求められることも変わってくる中で、子育て支援に求められることも当然変わってきているのではないかと、（表1）のよう

表1 時代の変化と保育の創造 (金田1986) (追加・修正, 1992, 2002)

- ・子どもの状況 ① 自立・体力・体力の向上 ② 自立・体力・体力の向上
- ・日本における生活様式の変化 ① 知的早熟 ② 知的早熟
- ・日本における生活様式の変化 ① 知的早熟 ② 知的早熟
- ・日本における生活様式の変化 ① 知的早熟 ② 知的早熟

	1960	1980	1990	2000	E
産業等	A 農業が産業の中心	B 工業化の進行	C 情報化=高度工業化	D 高度情報化・国際化	E IT化(超高度情報化)グローバル化
生活関係	<ul style="list-style-type: none"> *地域・家庭内で生産労働にも行われていた。 *地域・家庭に教育力があった。(自然とのかわり・人間関係) 	<ul style="list-style-type: none"> *都市化・人間関係の希薄化 *核家族化(家庭規模縮小) *生活の中から労働が消える *時間空間の窮乏化 *自然からの隔絶 *能力の管理 *情報の氾濫 	<ul style="list-style-type: none"> *労働条件の変化 *単身赴任、労働法「改訂」 *婦人の夜間労働可 *男性の一日の長時間労働の制限はなくなる *自然破壊の進行 *家事労働の外注化 *人格の管理 *コンピュータ管理 *キッズジュレス時代 *コンビニエンス 	<ul style="list-style-type: none"> 高度情報化・国際化 過労死多発 携帯電話消費 超核家族化、少子化、児童虐待の顕発 高齢化 超高齢出産可能、クローン生物の出現、遺伝子組換え食品の問題 規制緩和、フリーターの増加 進行(一方でビデオテープ運動、共生の考え方の普及) 進行、紙おむつの普及率増大 早期教育の加熱、学級崩壊、情報公開化 学校5日制導入、完全学校5日制開始、総合学習導入 コンピュータによる通信教育、メディア化拡大 ゲーム多様 完全キャッシュレス化の方向へ コンビニの機能拡大(ATMも)ペイオフ解禁 無人コンビニエンスの増加 	<ul style="list-style-type: none"> IT化(超高度情報化)グローバル化 失業率増加、50代の自殺率増加 低年齢化、公衆電話の減少 家族の多様化、「パラサイトシングル」概念の出現 ニート、ポスト青年期 シングルマザーの増加、児童虐待の増加 進行、保育・福祉の商品化の進行
子ども・保育	<ul style="list-style-type: none"> *遊びながら手伝い、手伝いながら遊んだ。 *タテワリ保育 	<ul style="list-style-type: none"> *意図的に飼育栽培を幼児保育にとり入れ、「労働的あそび」が導入される。 *タテワリ保育 	<ul style="list-style-type: none"> *家事労働も労働的あそびとして導入される。「カラーライズづくりほか」 *異年齢集団保育盛ん 	<ul style="list-style-type: none"> *家事のサポート機能 *延長長時間保育 *多角的な交流保育 *地域へ向かう保育の創造 	<ul style="list-style-type: none"> *「気になる子」「切れる子」の増加 *感性とからだ・ことばの分離 *不安定なおやの生活を肩に背負い自己信頼感の育ち不十分
					<ul style="list-style-type: none"> *「感性と知性・からだ」とことばの統合の重視(人格の統合) *自己信頼感・自己発揮→「社会力」・変革主体へ(個の確立の基礎) *子育てで支援「量から質へ」(生き方とつながる共同の子育て支援へ)

*親たちは、どの時代に子ども時代を送っていたのだろうか。

出典：金田利子監修 「地域で親子をどう支えるか」 静岡発達科学研究会編

に仮説してきている。

すなわち、時代を横軸にとり、縦軸に産業構造・生活関係・保育実践をおき、その内容の変化をたどり、そこから今日の子どもの姿と保育の課題について観たものである。

ここから引き出された子育て支援の仮説のポイントは、「量から質へ」（生き方とつながる共同の子育て支援へ―表1右下太枠）にある。時代の変化の中で変わってきた子どもと親の姿を踏まえ、変化に抗して真に子どもと親の育ちに必要なものは何かを捉える視点から出された仮説である。

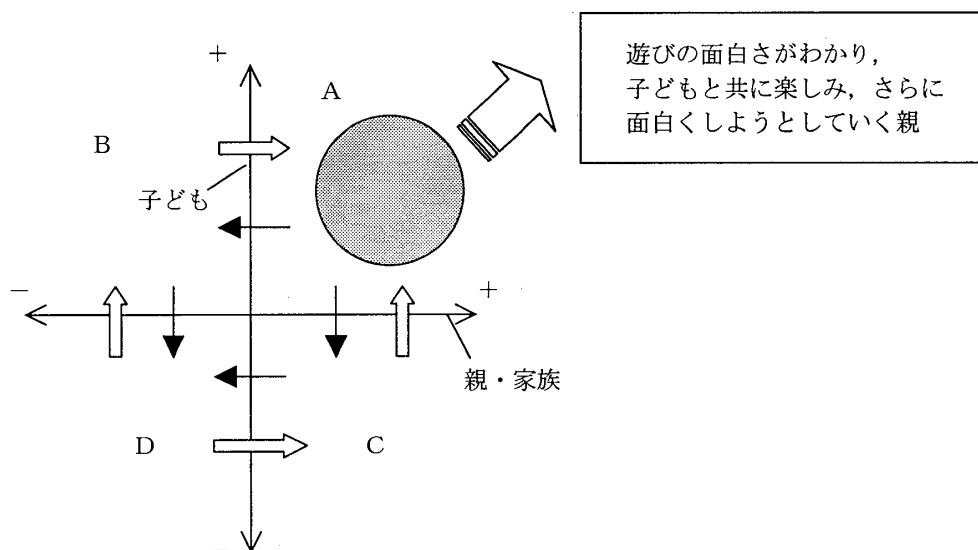
この仮説は、すべての親に通用するが、次の（図1）のAゾーンの親に特に意味をもつと考えられる。（図1）は、援助を必要とする親子を、それぞれのリスクのあるなしでクロスさせ4つに大別したもので、この（図1）について解説すると、子ども（個体、生理的）要因をたて軸に、家庭、養育環境要因をよこ軸にとり、ハイリスクをもつ場合を「-」に、リスクがあまりない場合を「+」に、その関連を元に、グループ別支援図（2001）を作成している。このグループは、固定的ではなく、それぞれの家庭の危機や転機に対して、さらに危機的な状況が積み重なると ← ↓ の方向に移行することがある。⇒ の方向に向かう援助ーリスクを取る、あるいは、予防するという視点での援助が求められる。子どもと養育者のハイリスク要因をあげると、

- ① 子どものハイリスク要因―先天性障害、発達障害、病気、アレルギーなど、子ども自身に何らかの「育つ力」の弱さがある。
- ② 親・家庭環境のハイリスク要因―若年出産、人格障害、アルコールや薬物依存症、精神障害、知的障害、病気、頻回の転居、経済的困窮、離婚や死別、家庭不和、育児協力者がいない、要介護の家族がいるなど、親や家庭環境に何らかの「育てる力」を発揮できない要因がある。

Aゾーンは親にも子にもリスクがない場合であるが、それでも、先の表1に見るように今日のような子育てしにくい社会の中では、相応の支援がなければ、いつBゾーンやCゾーンに転じていかないとも限らないのである。その場合、支援はサービスを単に提供するのではなく、親自身がその生き方と合った親・市民（人間）として育つことにあり、それを通して地域社会の担い手に育っていくことが課題となる。

一般に幼稚園・保育園における園庭開放などの子育て支援事業の対象は、多くの場合このAゾーンに入るものと思われる。しかし、今日の子育て支援実践においては、先にも述べたようにそうした対象による違いの考慮が必ずしもなされていない。

そこで、ここではAゾーンに入る親子の支援ということを考え*、あえて「子育て支援」とは言わず、「未就園児を持つ親子のためのワークショップ」（このために開催される場を「広場」と呼ぶ）とし、そのことを意識した「広場」の実践を追ってみることにした。



【図1】 子供と親の関連から見た問題の位置の座標 (今泉・金田2001作成)⁷⁾

その際、まず子どもの育ちの中で大切な「遊び」に注目し、親の親としての育ちは、「親自身が子どもと共に「遊び」を楽しむ資質の養成」から始まるのではないかと考えた。子ども理解が親としての主体的に育児をする親力の第一歩であるとするれば、子どもの主導的活動の「遊び」はとても重要であり、ともに楽しむことが親の資質として不可欠な力ではないかという仮説に立つからである。

そして本論文においては、そうした視点で、Aゾーンにいる未就園児の親子の育ちを支えていこうと取り組んできた白梅学園大学附属白梅幼稚園の「ひよこの会」の実践を分析し、この仮説の検証の一環としたい。

本研究は、「遊びのおもしろさがわかり、子どもとともに楽しみ、さらにおもしろくしようとしていく親」に育つことが目標であり、そのことが、どのように、そしてさらに発展した子育ての主体としてつなげられていくかについては、今後の課題にしていきたい。

Ⅱ. 方法

1. 対象

白梅学園大学附属白梅幼稚園 未就園児をもつ親子の支援活動（本論文では「ワークショップ」と呼ぶ）「ひよこの会」

① 「ひよこの会」の概要とねらい

幼稚園を中心としたさまざまな子育て支援が行われ、次世代育成支援の方針として「地域の子育て教育センター」としての役割も求められるようになってきている。白梅学園大学附属白梅幼稚園においても、地域の家庭にいる親子への支援の一環として未

就園児をもつ親子を対象とした、「ひよこの会」を行っている。

「ひよこの会」は、未就園児をもつ親子の会で、園として取り組んでいる子育て支援活動としての「広場」である。「ひよこの会」では、2つの取り組みがなされている。①あそびを紹介するテーマ活動、②園庭開放（園庭での自由活動）である。そこでのねらいは、「親子で一緒に遊べる遊びのアイデア（情報）や材料、遊び方を伝えていくことにより、親子へ遊びの紹介をする」、「幼稚園の教諭が、子どもへ関わって見せることにより、親子の関わり方を知ってもらう」としている。

以前は、子育て支援活動のひとつとして、「ひよこの会」と併行して、「たねの会」が、年2回行われていた。「たねの会」は、白梅幼稚園教諭2人が近隣の未就園児に対して公民館などで遊びの提供や子育て相談に応じるもので、土曜の午前中に行っていた。ここでは、白梅幼稚園教諭とNPO法人「きらら」（子育て支援事業）との共催のもの（5月）や、白梅幼稚園卒園児の母親たちから成る人形劇団“ぐーちょきぱー”の公演と園庭開放（9月）等である。その「たねの会」に参加していた親たちからの「子どもどどのように遊んでよいかわからない」「もっと参加できる回数を増やしてほしい」という声を受け、毎年実施回数を増やしていきながら、親のニーズをとらえ、ねらい・内容の検討を重ね、未就園児をもつ親子のための「広場」である「ひよこの会」に、多くの親子が参加して遊べるようにと準備をしてきた経緯をたどってきたのである。現在は、担当者は幼稚園教諭2名で進めているが、通常の保育と併行して園庭や園ホールで遊ぶテーマ活動と園庭開放（園庭での自由遊び）をしていることから、園全体の共通理解と協力のもとで行われている。また、さまざまな教諭が参加できるようテーマによって、担当教諭が入れ代わり行っている。

② 「ひよこの会」の対象と参加者

「ひよこの会」の対象は、未就園児（3歳未満児）とその保護者である。年間登録制を取り、活動の内容の予定表を渡し、参加したいときに自由に参加できるようにしている。また、参加希望者は、いつからでも登録可能とし、1回だけの体験参加も受け付けている。そのため、登録制をとってはいるが、参加している親子の、参加回数、参加者は固定しているわけではない。

③ 日時と場所

週一回、水曜日の10時から11時半まで、白梅幼稚園内のホール及び、園庭を開放して行われる。夏休み、冬休み、春休みの期間は行われていない。隔週で、テーマ活動の日と園庭開放の日を設定している。

2006年5月から2007年3月では、31回行われ、テーマ活動、16回、園庭開放、15回行われた。

④ 活動内容と時間的流れ

「ひよこの会」の活動は、テーマ活動と園庭開放の2つの形態で行われている。

テーマ活動（遊び）は、園のホールや園庭において行われ、保育者（幼稚園教諭）が1年間の遊びのテーマを決めその「遊び」を親子に紹介している。「遊び」の遊び方、その遊びがさらに楽しめるアイデアなどを伝え、親と子が一緒に遊ぶこと（共同作業）を促している。保育者の主導の中で、親子が一緒に遊ぶことにより親子で遊びのおもしろさ感じ、楽しめること、そして、それらを通して楽しい遊び方を知ってもらうことを目的としている。（表4）

園庭開放は、幼稚園の平常保育の時間帯に園庭を開放している。幼稚園の園庭では、未就園児の親子が園庭の固定遊具やその他の遊具などを自由に使用して遊ぶ、親子の自由遊びの時間となっている。親子主導の活動といえる。そこでは、園児とのふれあいや保育者との会話、子育て相談や、保育者が親子の遊びにかかわることにより、子どもへの関わり方を親が学べる機会にもなっている。この2つの形態の広場では、遊びを通しての親と子の関わりはもちろんのこと、子ども同士の交流や親同士の交流が活発にみられている。

また、「ひよこの会」は、2つの形態の活動を、一つの「広場」で行っていることが特徴となっている。

*時間的な流れ

表2 テーマ活動

10:00	受付開始 名札を付ける
15	活動開始 (遊びの説明を受けて遊ぶ)
11:00	子どもの興味に合わせて自由行動
11:30	終了 名札を返す

表3 園庭開放

10:00	受付開始 名札を付ける
15	園庭で自由遊び
11:00	ホールにて（保育者による）お誕生会・紙芝居・手遊び 絵本の読み聞かせ
11:30	終了 名札を返す

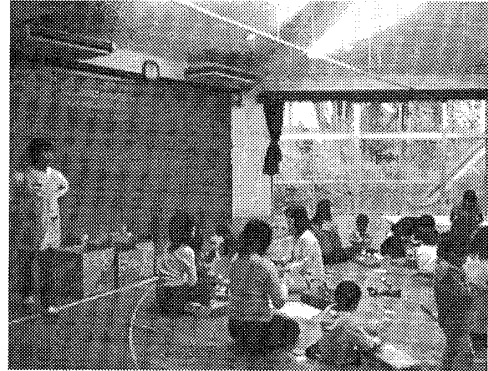
表4 「ひよこの会」活動内容（2006年～2007年）

	テーマ活動日・内容	園庭開放日
5月	10日…段ボール遊び 24日…親子体操	17日 31日
6月	7日…色水あそび 21日…新聞やぶき	14日 28日
7月	5日…水遊び（池）	12日
9月	6日…水遊び（池） 20日…絵の具	13日 27日
10月	4日…ボール遊び 18日…砂遊び	11日 25日
11月	15日…小麦粉粘土 29日…空箱で遊ぼう	8日
12月	13日…ミニミニ運動会	6日
1月	17日…のりものごっこ 31日…つみ木・ブロック	24日
2月	14日…お買い物ものごっこ 28日…茶話会	7日 21日
3月		7日

《テーマ活動の様子》



新聞やぶき

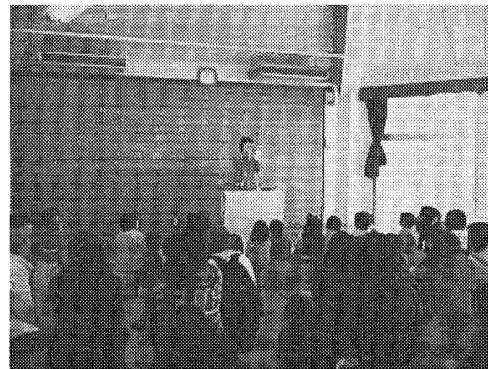


空き箱で遊ぼう

《園庭開放の様子》



砂場遊び



ホールでの手遊び

2. 親子関係の発展過程の観察とその方法

「ひよこの会」に参加している親子を対象として、「ひよこの会」での遊びを介した、親の「遊び」に関する意識の変化を見るため、「ひよこの会」の親子へのアンケートの結果と、筆者による参加型観察記録を資料として用い、「遊び」を介しての親子関係の発展過程について分析する。

参考資料に用いたアンケート項目の内容は、参加回数、母親の年齢、子どもの年齢・出生順位、ひよこの会に参加した理由、子どもの喜んだ遊び、ひよこの会に参加してよかったこと、ひよこの会への要望等である。期間は2006年5月から2007年3月に参加した親を対象に、3回（5月、10月、3月）行った。

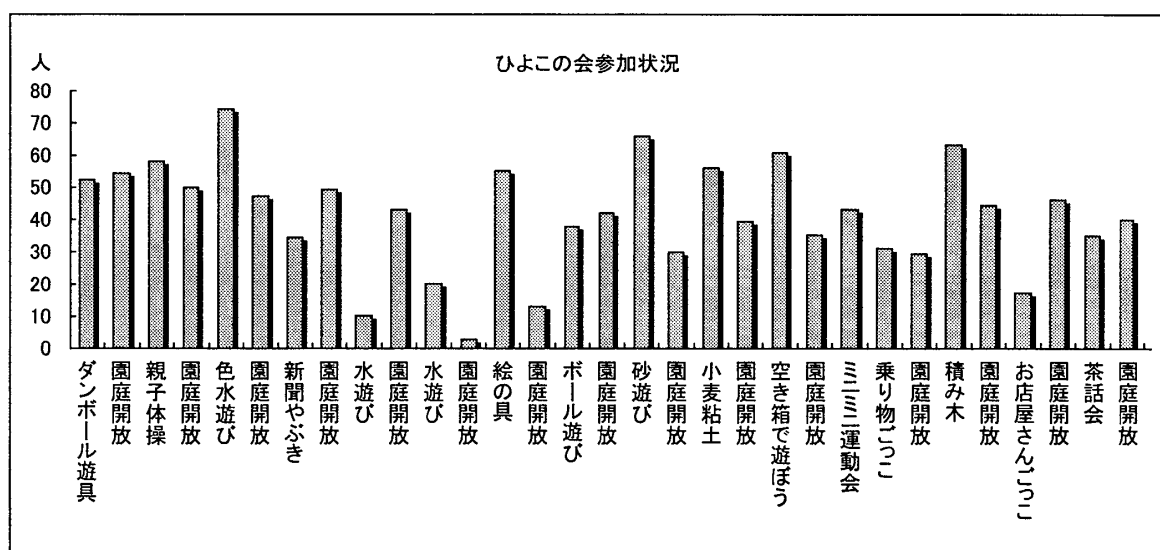
参加型観察記録は、「ひよこの会」に毎回参加し、親子と関わりながら活動内容（遊び）やそのときの親子の様子、活動（遊び）場面での親へのインタビュー等の筆記記録、活動の様子を写真・ビデオでの記録をしている。

Ⅲ. 結果

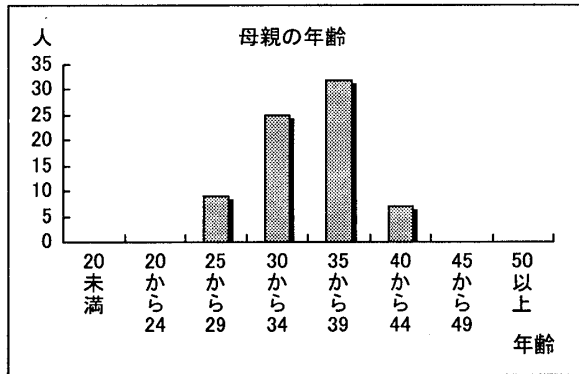
① 参加状況

アンケートの結果から見ると、回答数については、1回目は、35名、2回目は38名、3回目は40名の回答を得られた。参加状況は、5月（1回目）、52組の参加が見られ、一番多いときは、74組の親子の参加があり、最も少ないとき（雨天）は、3組であった（図2）。年間の平均は一日当たり47組で、一年間の登録者数は134組にのぼる。参加状況は、未就園児であることから、天候や気温・幼いことでの体力的な問題等、外的な条件に左右されやすく、プログラムについても柔軟に対応していくことが必要になる。

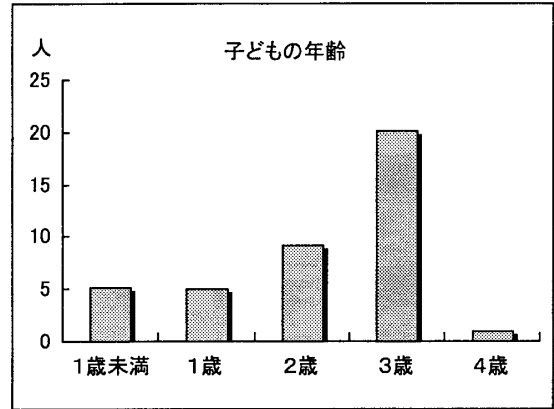
参加期間については、2年前から継続して参加している親子が40%見られ、今年度から新たに参加した親子は50%である。継続して参加する親子が多い点は、「ひよこの会」が地域において認知され、根付いてきている傾向と捉えられる。母親の年齢は、35歳から39歳までの親が最も多く、次いで、30歳から34歳の親であり、3番目に、24歳から29歳までの親が多かった（図3）。母親の年齢が割合高い事については、白梅幼稚園に兄弟が入園していて、その弟だったり、妹だったりするケースが多いことからのようである。第2子・第3子でも、「ひよこの会」に参加する傾向がみられるのである。子どもの年齢は、3月時点で、3歳児20人（49%）、2歳児9人（22%）、1歳5人（13%）、1歳未満児5人（13%）であった（図4）。3月の時点での3歳児の参加が多いことは、「ひよこの会」の開催場所が、幼稚園であることで、将来、入園することを視野に入れた参加も考えられる（図5）。男女別では、特に偏りは見られなかった。出生順位は、1回目のアンケートでは、第1子が60%であったが、2回目以降のアンケートからは、第1子と第2子の差は見られなくなっている。



【図2】1年間の参加人数（縦軸一人数）



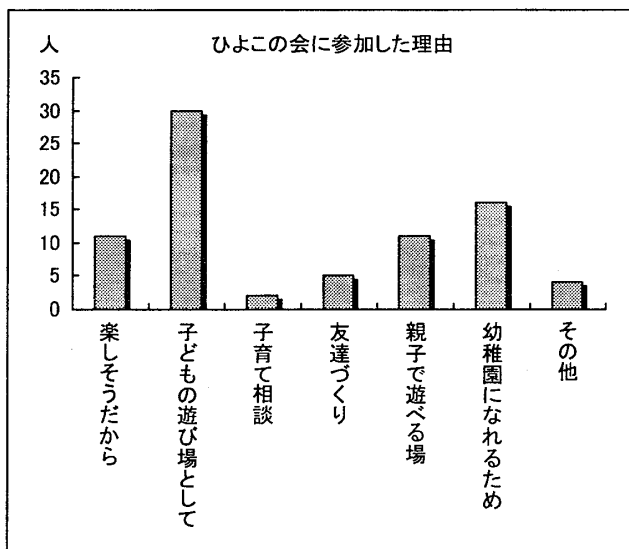
【図3】 母親の年齢（縦軸—人数・横軸—年齢）



【図4】 子どもの年齢（縦軸—人数）

② 「ひよこの会」に参加した理由

1回目（5月）のアンケートでは「子どもが遊べる場があるから」という理由で参加する親が多かった。2回目（10月）のアンケートでは「いろいろな遊びが経験できる」「子どもがよく遊ぶ・安心して遊べる場がある」という理由が多く上げられている。3回目（3月）のアンケートでは、図5に見られるように、1位が「子どもの遊び場として」、2位が「幼稚園になれるため」3位が「親子で遊べる場」、「楽しそうだから」という順位であった。ほかに、子育て相談は、ほとんど見られないという結果であった。



【図5】 ひよこの会に参加した理由（縦軸—人数）

《テーマ活動での様子》



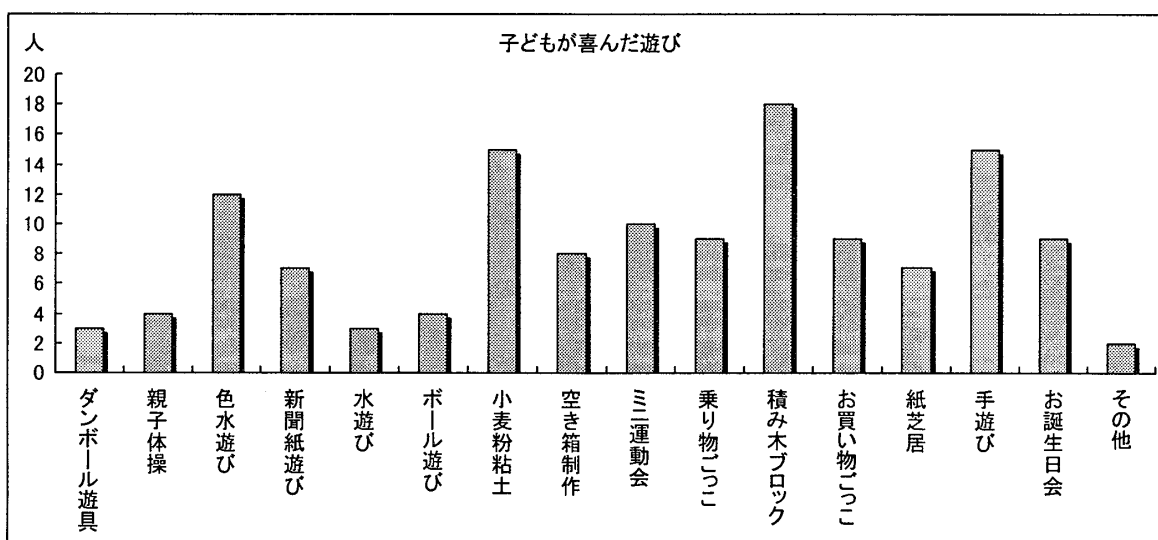
絵の具遊び

表5 参加理由についての調査結果の特徴

聞き取り調査の時期	参加理由
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・安心して子どもが遊べる場があるから ・幼稚園で安心だから
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな遊びが経験できる ・子どもがよく遊ぶ, 安心して遊べる場がある
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの遊び場として ・入園前で幼稚園になれるため ・親子で遊べる場がある ・楽しそうだから

③ 子どもの喜んだ遊び

1回目のアンケートではアンケートの時期が5月という、始まって間もない時期であることから、5月に保育者が設定したテーマである「色水遊び」や「絵の具遊び」という回答が多かった。初めは、親も子も、「ひよこの会」という場に馴れることや、会の状況を探る時期であるのか、受け身的な姿勢が感じられる。2回目のアンケートの頃になると、「新聞やぶき」「色水遊び」や「ペインティング」「手遊び」「砂場遊び」などを挙げている。この頃になると、「家ではなかなか遊べない遊び」や、「親が覚えることで家でも遊べる遊び」への反応が多くなっている。「新聞やぶき」「色水遊び」や「ペインティング」などは、初めて遊んだ親子がほとんどであった。3回目のアンケートでは、(図6)のように、「積み木ブロック」「小麦粉粘土」「手遊び」「色水遊び」「お誕生会」「ミニ運動会」の順である。遊びの内容についてみると、「家で手作りして遊べる遊び」「親が覚えることで家でも遊べる遊び」「家では汚れるなどでなかなか遊べない遊び」「親子で思いきり体を使って遊べる遊び」、また、「お誕生会」では「わが子が主役になれてみんなに祝福される」「手作りのペンダントがもらえてうれしいこと」などで、これは「親も一緒に喜べること」「楽しい気持ちになれる」ことがポイントになっているといえる。つまり、遊びについて、「親子で遊べてなおかつ、家に持ち帰り家でも遊べる要素のある遊び」や「広い場所で他の親子と一緒に遊べる要素のある遊び」であり、「子どもだけが喜ぶ遊び」ではなく、「親も楽しく遊べるもの」を選ぶ傾向がみられてきていることになる。(表6)



【図6】子どもが喜んだテーマ遊び（活動）（縦軸—人数）

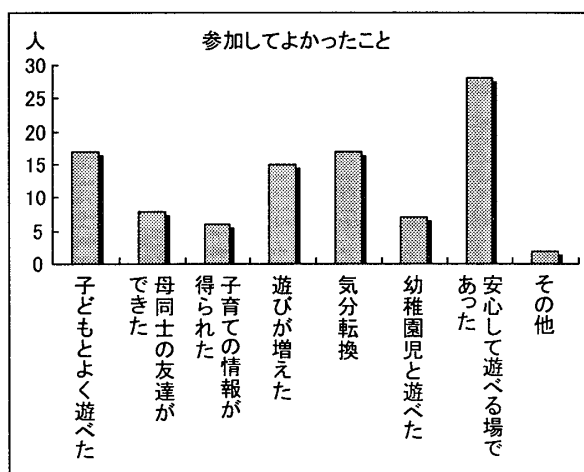
表6 子どもが喜んだテーマ遊び（活動）の特徴

時期	遊びの種類	喜んだ遊びの特徴
5月当初	「色水遊び」, 「絵の具遊び」	・家ではなかなかできない遊び
10月	「新聞やぶき」, 「色水遊び」や, 「ペインティング」, 「手遊び」, 「砂場遊び」	・家ではなかなかできない遊び ・親が覚えて家で遊べる遊び
3月	「積み木ブロック」, 「小麦粉粘土」, 「手遊び」, 「色水遊び」, 「お誕生日会」, 「ミニ運動会」	・家で手作りして遊べる遊び ・親が覚えて家で遊べる遊び ・家では汚れるなどで、なかなか出来ない遊び ・親子で思いきり体を使って遊べる遊び

④ 参加してよかったこと

1回目のアンケートでは、「2人で遊べる時間がもてた」「先生がアットホームでうれしい」「家ではできないことができてよかった」。2回目では、「家庭だけでは体験できない遊びができる」「皆様の目が優しく、見守りがあるので安心感がある」、「家にあるものを使った遊びを色々教えて貰ったこと」「子どもが楽しそうにしている」など子どもの遊んでいる様子や、「遊び」についての記述が多くなっている。3回目のアンケートでは、(図7)のように、1位「安心して遊べる場であった」、2位「子どもとよく遊べた」、3位「気分転換」、4位「遊びが増えた」の順である。ここでも、「母親同士の友達ができた」、「幼稚園児と遊べた」の項目より「遊び」ができることが上位にきている。「遊び」

を親子で楽しめることに親の意識が向かっていることがうかがえる。3位の「気分転換」については、親子が一緒にいる中での気分転換ができるということになり、そのことは、母子分離、つまり、子どもだけを預けて母親が解放されることによる気分転換とは大きく異なる。「ひよこの会」に参加することで、遊びを介して親と子が楽しく過ごしていると考えられ、それが親子の主體的な参加に繋がっているといえる。



【図7】 参加してよかったこと (縦軸-人数)

⑤ 「ひよこの会」への要望

1回目のアンケートの自由記述では、「親対子だけでなく、子ども同士でなにか楽しめるものもやってほしい」「記念に残るものがあるとよい」「体操のときは音響（マイクの音）が大きいせいか、落ち着かない様子でした」「荷持の置き場所がよくわからない」など。2回目では、「ホールでの遊びをもっと多くしてほしい」「外遊びをみんなで遊びたい」「家でできない遊びをもっとして欲しいです」「わらべ歌のミニコンサートなどききたい」「昔の遊びなどをして欲しい」などであった。3回目のアンケートでは、「もっといろいろな遊びを知りたい」「子育てや、年齢毎の発達など10～20分でいいので帰りの会の時に色々お話があったらいいと思います」「祖父母と孫の会等があればいいのになあと思う」「交流会や入園前のお話。年齢別の遊び、子どもの心や成長、季節のお便りみたいなプリントがほしい」「幼稚園の情報がほしい」などの要望であった。内容からみると、1回目は、「ひよこの会」で行われている「遊び」そのものの内容についてはない要求的な内容の要望が多かったのが、2回目では、「遊び」そのものの内容への要望が見られ、3回目では、親の意識が「遊び」へいっそう向きつつ、一方では子どもの成長・発達への関心が見られてきている。これが、遊びをより発展させるものか、遊びから離れて発達や学習を意識し始めたものか、その点は今後さらに調査し追求することが必要となろう。

さらに、祖父母と孫の会、交流会などの要望があるように、親子以外の関係にも目が向けられてきおり、子どもとの関係について親以外の関係へと視野の広がりが見られるようになってきている。

IV. 考察・まとめ

1. 「仮説」から見た実践の成果

以上のように、ここでは、「問題および目的」において取り上げた図1 (P51) のAゾーンに当たる、親にも子どもにもリスクの少ない親子の支援のあり方について、実践を通して調査・検討してきた。それは、白梅幼稚園の「ひよこの会」の参加者、つまり、未就園児をもつ親子の、「遊びを介した親の意識の変化」に関する分析である。「ひよこの会」に参加している親子は、アンケートの結果から見て、継続して参加している親子が多いこと、毎回の参加人数が多く、参加意欲が強いことがわかり、まさに、Aゾーンに属していることがわかる。

その実践の視点は、こうした親子でも、いつ問題（リスクを背負う）が起こるかわからない今日だけに、子育て支援は不可欠になると考える。その支援の方向は、親が、親として人間として育つことをめざした支援である。そして、親の育ちの実践の仮説を、「遊び」の面白さを知り、子どもとともに「遊び」を楽しもうとする親の意識の育ちにおいたのである。そこでまず、先の「ひよこの会」の1年間の実践でその点がどう育っているかを考察する。

実践の成果を客観的に捉えるため、3回のアンケートの結果を参考資料とした。しかし、「ひよこの会」に参加する親子が、常に固定していない状況であったため、「結果」で述べた内容はアンケートの結果と、参加型観察記録で捉えてみてきた。それをもとにまとめたその結果をみると、5月当初は、「子どもの遊べる場がある。」という意識で参加し始めた親が、各回に用意されたテーマ活動や、園庭開放での自由遊びをきっかけに、遊びに対する意識に変化の様子が見られはじめた。

広場としての「ひよこの会」で、子どもと安心して遊べること、子どもが喜んで遊ぶことを経験することによって、「親も遊びを覚え」、「親が遊び方を学んで」いき、「親が子どもと遊びを楽しめる」ように親の意識の変化が見られてきている。遊びの内容についても、「子どもが喜んだ遊び」から、「親子で遊べ」、なおかつ、「家に持ち帰り家でも遊べる要素のある遊び」や、「広い場所で、他の親子と一緒に遊べる要素のある遊び」を好み、「子どもだけが喜ぶ遊びではなく親も楽しく遊べるものを好む」傾向がみられてきており、親子の遊びに対する興味・関心が高くなり意識の変化が見られている。さらに、子どもの発達理解への要求も見られてきている。これは、遊び理解が発展したためともとらえられるが、入園という機会と関わって遊びの追求だけでよいのかと、これまでの流れを見直しているともとらえることもできる。発達理解への要求を、単に短絡的な「知育」への関心としてではなく、遊びと関連したものとなるような支援が求められてきているのではないかと思われる。

いずれにせよ、5月から10月へと進んできた遊び追求への意識とは傾向が違ってきてい

る。このことから、子どもとともに遊びを楽しむだけでなく、遊びから親としての主体形成の発展につなげるような支援をしていくことが必要となってくることを示唆していると考えられる。

2. 今後の課題

- ① 遊びの面白さを知るところから、子育ての主体として、さらには地域再生主体への仮説とその検証が課題となるといえる。

「問題」の項でも触れているが、遊びの面白さを知り、子どもとともに遊ぶことを楽しめるようになった親が、やがて、自ら子育ての主体になり、さらには地域の再生にどう主体的に動いていけるようになっていくか、そこにおける発展の過程の分析が必要になる。

すなわち、考察の最後に述べたことと関わるが、親の更なる育ちの発展過程を吟味し、そうした仮説による実践とその検証が今後の課題となる。

この課題は、図1 (P51) において、大きく見るとAゾーンに属する親子で、「ひよこの会」へ参加する親への、子育て支援の質的な向上に繋がる。その質の向上にむけての支援の方法をいっそう明らかにし、そのAゾーンの親自身がB, C, Dゾーンにおける親子の支援へと意識を向けていく可能性を、追求していきたいと考える。

- ② 「ひよこの会」の実践自体の発展的検証としては、次のことが上げられる。

本幼稚園の「ひよこの会」の場合、「テーマ活動」の日と「園庭開放」の日を交互に実践している。そのことが、親の遊びに関する学びの発展に功を奏しているのではないかと考えられる。そのため、その点について明らかにすることが課題となる。

多くの地域に広がってきている「子育て支援」のための「広場」においては、この二つの保育の方法（保育の方法の一つとして、「テーマ活動」と「園庭開放」の日の内容をとらえると）を交互に行っているところはほとんどないように思われる。そして、「子育て支援」におけるカリキュラムをどのように作っていくかの検討が、目下急務になってきている。それだけに、そのことと深く関わるテーマ活動（保育者主導）と園庭開放（親子主導）の関係を明らかにすることも、また焦眉の課題となってくる。

乳幼児保育の場合の「自由遊び」「設定保育」に短絡的に対応させることはできないが、子どもの保育にのみカリキュラムの構造があるのではなく、親育ちの場においても、カリキュラムの構造とその科学的探究が課題になっているという点では、繋がるものがあるように思われる。その点から考えて、「ひよこの会」が二つの異なる「広場」の方法を一つの「広場」の中で組み合わせて行ってきたことの成果の検証が、今後の有意義な課題だと言える。

最後にアンケートやヒアリングに快く応じてくださった「ひよこの会」の参加者の皆様

に、また、「ひよこの会」の担当をされた先生方をはじめ、白梅幼稚園の教職員の方々や園児の皆さんに深く感謝申し上げます。

注および引用文献

- 1) 日本保育学会の学会誌「保育学研究」1997～2007 第35巻～第45巻の21冊で見える限りでは、幼稚園における未就園児の親子に対する子育て支援の研究は見られない。
- 2) 大戸美也子 2005「子育て支援の現状と課題」保育学研究 43(1), 62
- 3) 金谷京子, 坪井敏純, 吉田ゆり 2005 子育て支援の限界と今後の課題「保育所を中心とした子育て支援活動調査から」保育学研究 43(1), 63-75
- 4) 無藤 隆 2007「乳幼児および学童における子育て支援の実態と有効性に関する研究」科学研究費補助金研究成果報告書(2004～2006年度)
- 5) -1 杉山弘子, 鶴間順子, 坂本由佳里, 斎藤亜紀 2002「幼稚園における子育て支援についての一考察—未就園児の遊びの会の実践を通して」尚絅女学院短期大学研究報告第49集, 31-43
- 2 杉山弘子, 東義也, 佐藤陽子, 石田一彦, 2007「宮城県における子育て支援事業の実態(5): 地域子育て支援活動についての訪問調査」尚絅学院大学紀要54, 113-125
- 3 色川幸子, 畑山みさ 2007「幼稚園が担う子育て支援方策の検討(7) 未就園児親子通園クラス「ぽっぽくらぶ」2年目の実践報告」宮崎学院女子大学附属発達科学研究所No.7 55-62
- 6) 金田利子 2004 生涯発達・異世代・異文化の相互理解と新たな共生 「家族援助を問い直す」岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行監修 金田利子・齊藤政子編著 同文書林
- 7) 金田利子 2004「地域で親子をどう支えるか」静岡発達科学研究会編 金田利子監修 三学出版

かわきた まさよ (幼児教育学)

かねだ としこ (保育学・生涯発達論)

しもいで ひろこ (保育学)

おおうら ようこ (保育学)